

Title	Michel Vovelle : La Revolution française, Images et récit. (1789-1799)
Sub Title	
Author	平山, 栄一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1987
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.57, No.3 (1987. 11) ,p.169(507)- 170(508)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19871100-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

フランス革命二百年記念の出版

Michel Vovelle: La Révolution

française, Images et récit.

(1789—1799)

Livre Club Diderot, Messidor (1986)

Préface de Claude Mazauric

平山栄一

一九八九年は、フランス革命勃発から二百年目になるので、フランスでは種々の記念事業が計画され、そのための組織委員会は、すでにミッテラン社会党政権の成立した翌年の一九八二年に発足し、一九八九年七月にはパリで各国の研究者を集めた国際会議の開催が予定され、別に一般の文化的催しのため、昨秋革命二百年祭実行委員会が、大統領と首相の合意で発生したとのことで、それらのキャンペーンのため委員会長ミッシェル・ヴォヴェル、パリ第一大学（ソルボンヌ）教授が、本年四月末に初来日された（朝日新聞四月二十七日）が、すでに訪韓、

訪ベトナムに出發された。同教授の言によれば、革命史研究は、民衆意識の分析を重視するアナル派社会史に押されて多少停滯気味であるが、やはり世論の七〇％はフランス革命の祝祭に賛成しており、革命史は現在再検討の必要がある、とのことである。

ここでは昨年後半に出版された表題の書について、序文を書かれたルアン大学のクロード・マゾリック氏（パリの Editions Sociales 出版社の主催者でもある）の考え方を紹介してから、同書についての若干の所感を述べてみたい。

「世界の変革には長い時間を要した。たとえば古代ギリシアの民主主義が形成されるには三分の二世紀が必要であったが、その民主主義も結局は自由民に限られていた。フランス自身も、古典時代、バロック時代、啓蒙時代というアンシャン・レジームの三世紀を過ぎてから、革命を迎えたが、それは一七八九年から十年間という短期の出来事であり、現代の起原としては驚くべき短かいものであったが、その間に近代民主主義の最初の形態を成立させ、王と聖職者の權威を失わせ、人權の宣言をおこない、フランスをとり囲む諸国に向っても深い影響をあたえた。フランス革命の普遍的意義を考えると、明晰な哲学者であったカントの言葉、「革命はその本質そのものにおいて道徳である。最初に各民族は、外国の干渉なしに、その好む憲法を自己に付与する権利をもつ……」は重要である。このようになお、一七八九年の革命二百年を祝うことは、決して軽々しい騒ぎなのではない。

世界は変り、種々のメディアが発明されたが、革命を理解するために、同時代の種々の絵画や各種の図版を、説明とともにみることは必要は変りなく、すでに一九八二年の始めに、筆者はアルベール・ソブール教授(同年九月没)と、そのことについて語り合った。いまここに、ミッシェル・ヴォヴェル教授によって、フランス各地の文書庫や外国の分をも含めて、とり集めた革命期のイマージュの集大成が、一七八九年以来、始めて出来ることになった意義は、まことに測り知れないものがある。」

革命期の絵画類は、これまで種々の本に記載され、革命についてのわれわれの理解を助けてはいるが、今回出された五巻の大冊は、絵画類や各種の素描をも含めて総数約三千種を越え、最新の印刷技術を駆使して、革命期の諸事件の描写ばかりでなく、人々の日常生活にいたるまで、カラー版その他を各ページに配し、一巻平均三五〇頁で五巻の大冊を構成し、出所、作者を明らかにしつつ、簡潔な説明文(écrit)を付して、フランス革命の全容が明らかにされるように工夫されており、次から次へと未見の珍しいイマージュが現われ、同種のものとして、モニュメンタルな集大成となったといえる。一例をあげれば、ダヴィッドの描いた有名な「ジュー・ド・ポームの誓」の絵は、そのもとに使用された数葉のデッサンを加えて成立過程を明らかにし、その他有名人物のカラーによる美しい絵など、飽きさせることなく、みるものを革命史の実態に引き込んでゆく。アンシアン・レジームの末期から、ブリュメールのクーデ

タにいたるまで詳細な、みる革命史として実に立派な出来映えの書となったことを、ここに紹介し、推薦したい。

(一九八七年六月十日)